１　緒　言

（１）はじめに

（我が国が着手した領域横断作戦）

平成 30 年 12 月 18 日、「平成 31 年度以降に係る防衛計画の大綱について」（新大綱という。）が国家安全保障会議及び閣議にて決定された。新大綱における「Ⅲ　我が国の防衛の基本方針」において、今後の防衛力については、「個別の領域における能力及び質を強化しつつ、すべての領域における能力を有機的に融合し、その相乗効果により全体としての能力を増幅させる領域横断作戦（Cross-Domain Operations、CDO という。）により、個別の領域における能力が劣勢である場合にも、これを克服し、我が国の防衛を全うできるものとすることが必要である。」[3]とし、国として領域横断作戦について初めて言及した。ここで言うところの領域には陸、海、空に、新たな宇宙・サイバー・電磁波領域を加え、現代戦においては、領域の組合せによる戦闘様相に適応することが、死活的に重要としている。領域横断の戦い方の発想は、同盟国軍である米軍が模索しているマルチドメイン・オペレーション（Multi-Domain Operations, MDO という。）の影響を強く受けていると考えられる。

（本研究の目的）

本研究は、第二次世界大戦後の米陸軍が、現在、ドクトリンとして深化を遂げつつある MDO の、それに至った経緯及びその過程における戦後の米陸軍の用兵思想の変化を、米陸軍のキャプストーン・ドクトリンの変遷から読み解く試みである。

Doctrine2015[4]で整理された、現在の米陸軍のドクトリン体系を別紙第 1 に、体系内のフィールドマニュアル（Field Manuals, FM という。）の全体像を別紙第 2 に、本研究における用語の定義を別紙第 3 に整理する。これ以降の用語の使い方は別紙第 3 に従うこととする。

別紙第 1「米陸軍のドクトリン体系（Doctrine overview）」
別紙第 2「米陸軍の Field Manual」
別紙第 3「本研究における用語の定義」

[3] 防衛省「令和元年版　防衛白書」, P.467　（1989 年）
[4] 2009 年のドクトリン会議において提起された、米陸軍は多くの FM を保有しているという問題認識の下、訓練教義コマンド（Training and Doctrine Command, TRADOC という。）が実施した最良の開発、更新、配布要領についての研究成果を受けた具体的取り組み。明解、簡明、最新、そして一体化したドクトリンを提供する試み

陸上自衛隊教育訓練研究本部

別紙第 1

米陸軍のドクトリン体系（Doctrine overview）

<table>
<tr><th>区　分</th><th colspan="3">説　明</th></tr>
<tr><td>ADP
Army Doctrine Publications
[15 ADPS]

Fundamental Principles</td><td>・軍・部隊が、国家目標の達成を支えるための彼らの行動の指針としての基本的原則を含む、陸軍省の出版物
・通常に約 10 頁程度
・主題の基本的な事項と、いかにそれらが、ADP3-0 を支えるかを説明
・ADP1（陸軍）、3-0（統合地上作戦）、7-0（訓練）、そして 6-22（陸軍の指揮・統率）は、陸軍参謀長により承認される。その他の ADP は、CAC 司令官による。</td><td rowspan="2">【ADP/ADRP】
1 The Army
3-0 Unified Land Operations

6-22 Army Leadership
7-0 Training Units and Developing Leaders

1-02 Operational Terms and Military Symbols
3-07 Stability
3-28 Defense Support of Civil Authorities
3-90 Offense and Defense
2-0 Intelligence
3-05 Special Operations
3-09 Fires
3-37 Protection 4-0 Sustainment
5-0 The Operations Process
6-0 Mission Command</td><td>行動指針と原則</td></tr>
<tr><td>ADRP
Army Doctrine Reference Publications
[1 per ADP]

Detailed information on fundamentals</td><td>・ADP は、ADRP により支えられている。「全ての教義的原則の詳細な説明であり、陸軍の全ての人々が、同じように説明できるための基本的な理解が提供されている。」
・Army Doctrine（陸軍省の出版物）であり、100 頁以下。CAC 司令官の承認</td><td>その理由</td></tr>
<tr><td>FM
Field Manual
[50 FMs]

Tactics and Procedures</td><td colspan="2">・戦術と手続き、手順を記述した Army Doctrine（陸軍省の出版物）
・本体には戦術が含まれている（最大 200 頁程度）。「部隊の運用と秩序ある配置（JP 1-02）」
・附録には手順が含まれている。「特定のタスクの実行方法を規定する、標準的で、詳細な手順が含まれている。（JP1-02）
・陸軍が ADP に記述された作戦をいかに実行するかについて記述
・FM は、Army Doctrine のための訓練教義司令部の責任者としての CAC 司令官により承認される。
・50 種類程度</td><td rowspan="2">実行要領</td></tr>
<tr><td>ATP
Army Techniques Pubs

Authenticated Version on APD input through wiki version</td><td colspan="2">・技術、手法を含む出版物「ミッション、機能、タスクの実行に使用される規範的ではない方法あるいは手法」
・各人称 Techniques Pub は、Wiki サイトにドラフトバージョンがある。
－wiki バージョンは、承認された出版物を迅速に変更可能にするため、現場からの入力を許容している。
－それぞれの Techniques Pub は、Wiki を通じた入力を確認し、承認された出版物に変更を加えることに関して、所掌機関の責任としている。
・Techniques Pub は、サイズや別冊の数などの制限はない。
・承認権者は、所掌機関（の長）である。</td></tr>
</table>

http://www.slideserve.com/ata/doctrine-2015-information-briefing　（last visited on March 6, 2020）
http://usacac.army.mil/sites/default/files/publications/Doctrine_Smart_Book_20161117.pdf　（last visited on April 8, 2020）

陸上自衛隊教育訓練研究本部

米陸軍の Field Manual

FM 区分	FM 番号、名称
Decisive Action [3]	3-07 Stability Operations, 3-90/1 Offense and Defense, 3-90/2 Recon, security and Enabling Tasks
Reference Publications [4]	5-02 Operational Environment, 27-10 The Law of Land Warfare 6-99 Report and Message Format, FM7-15 Army Universal Task List
Warfighting Functions [9]	2-0 Intelligence, 3-05 Army Special Operations, 3-09 Field Artillery Operations 4-95 Logistics Operations, 6-0 Commander and Staff Officer Guide 3-95 Infantry Brigade Operations, 3-96 Heavy Brigade Operations, 3-97 Stryker Brigade Operations 3-98 Recon and Security Operations
Branches [17]	1-0 Human Resources Support, 1-04 Legal Support to the Operational Army, 1-05 Religious Support 1-06 Financial Management Operations, 3-01 Air and Missile Defense Operations, 3-04 Aviation Operations 3-11 CBRN Operations, 3-34 Engineer Operations, 3-39 Military Police Operations 3-53 Military Information Support Operations, 3-57 Civil Affairs, 3-61 Army Public Affairs 4-01 Transportation, 4-02 Army Health System, 4-30 Ordnance Operations, 4-40 Quartermaster Operations 6-02 Signal Operations
Other Echelons [3]	3-55 Information Collection, 3-81 Maneuver Enhancement BDE, 3-94 Echelons Above Brigade
Types of Operations/ Activities [12]	2-22.3 HUMINT Collector Operations, 3-13 Inform and Influence Activities 3-14 Army Space Operations, 3-16 Multinational Operations 3-22 Army Support to Security Cooperation, 3-24 Counter Insurgency 3-27 Army Global Ballistic Missile Defense Operations, 3-38 Cyber-Electromagnetic Activities 3-50 Personnel Recovery, 3-52 Airspace Control 3-53 Internment and Resettlement（抑留と（難民の）再定住） 3-99 Airborne and Air Assault Operations
Special Category [13]	7-22 Army Physical Readiness Training

http://www.slideserve.com/ata/doctrine-2015-information-briefing　（last visited on March 6, 2020）

陸上自衛隊教育訓練研究本部

用語の定義と整理

	本研究における定義	具体例（あるいは相当するもの）		備　考
		陸上自衛隊	米陸軍	
Capstone Doctrine	作戦原理による陸軍の視点を確立するとともに、陸軍が作戦を行う際の原則、その際に司令官がミッションコマンドを行うための方法を提供する。さらに、編成、訓練、リーダー開発、資源、兵士、施設についての決心を行うための基礎を与える。（2011 年版 ADP3-0）	野外令	ADP1"Army" ADP3-0"Operations"	規準教範
規準教範（日本語）	（陸上自衛隊の場合） 教育訓練に一般的準拠を与える最高位の教範 （「野外令改正理由書」PP.1-2, 陸上幕僚監部, 2008）			Capstone Doctrine
Doctrine	軍隊ないしその構成要素が任務を達成するための行動指針。権威はあるが適用に指しては判断を必要とする。（2008 年版 FM3-0） ※Doctrine2015 後の初の ADP3-0 においては本文中にて Doctrine は定義されているが、米陸軍のドクトリン体系の中での意義・位置付け にも言及され、普遍的な意義ではないため、Doctrine2015 より前の定義を採用	野外令 指揮幕僚業務教範 部隊別教範 機能別教範 作戦別教範	Army Doctrine Publications Army Doctrine Reference Publications Field Manuals Army Techniques Pubs	・コンセプトを原則化（教範化、教書化） ・教条化しないよう、ユーザーに裁量を付与 ・教範の意と使用されるケースが多い ※米陸軍の場合、CAC（Combined Arms Center, TRADOC 隷下）が起草の役割を担う。
教　範	・自衛隊の行動及び教育訓練を適切、かつ、有効に実施するために、部隊の指揮運用、隊員の動作等に関する教育訓練の順序を示したもので陸幕長が作成（教範類に関する訓令（40.6.1） ・教育の手本となる書物。教典（広辞苑第 6 版）			Doctrine
ドクトリン（日本語）	（定義はされていないものの、教義、戦い方、運用原則などと解釈されている場合がある。）			・本来 Doctrine と同義のところ、陸自においては教範としての意を意識しているケースは少なく、この点が米陸軍の場合と異なる。 ・日本語でいう教義は Tenet が該当
Concept	（陸軍作戦コンセプト）は、統合軍の一部として陸軍が如何に作戦を遂行するかの詳細を示す、陸軍コンセプトフレームワークの鍵となるドキュメント https://www.army.mil/article/44440/the_u_s_army_operating_concept	戦い方、任務遂行要領	上記 Doctrine の検討段階のアイディア（研究成果としてパンフレット化）	・Doctrine の基礎となるアイディア全体 ・米陸軍の場合、FCC（Futures and Concept Center, Army Future Command 隷下）が具体化の役割を担う。
コンセプト（日本語）	（定義はされていないものの、構想、戦い方などと解釈されている場合がある。）			陸自においては、米陸軍より幅広に使用されている。
教義書	特定の主義・主張、あるいは戦法等を内容とするもの（野外令第 1 部の解説（46.6））			
原則書	一般普遍的な主義・主張、あるいは戦法等を内容とするもの（同上）			

陸上自衛隊教育訓練研究本部

（２）研究課題等

（本研究の課題）

第二次世界大戦後の米陸軍の最初のキャプストーン・ドクトリンである 1949 年版 FM100-5 “Operations”は[5]、1944 年版に大戦中の教訓等を反映した改訂版である。それ以降 10 回の改訂、その後の Doctrine 2015 の取り組み等を経て、更に 3 回の改訂を重ねて、現在のキャプストーン・ドクトリンは、2011 年版 ADP1 “The Army”、そして、2017 年版 ADP3-0[6] “Operations”であり、その具体的実行要領を記述するのが 2017 年版 FM3-0 “Operations”である。なお、米陸軍の 2011 年以降、現在の作戦は、ユニファイド・ランド・オペレーション（Unified Land Operations, ULO という。）であり、MDO はそこに含まれる作戦の 1 つと整理されている。

別紙第 4「冷戦後の米陸軍のキャプストーン・ドクトリンの変遷」

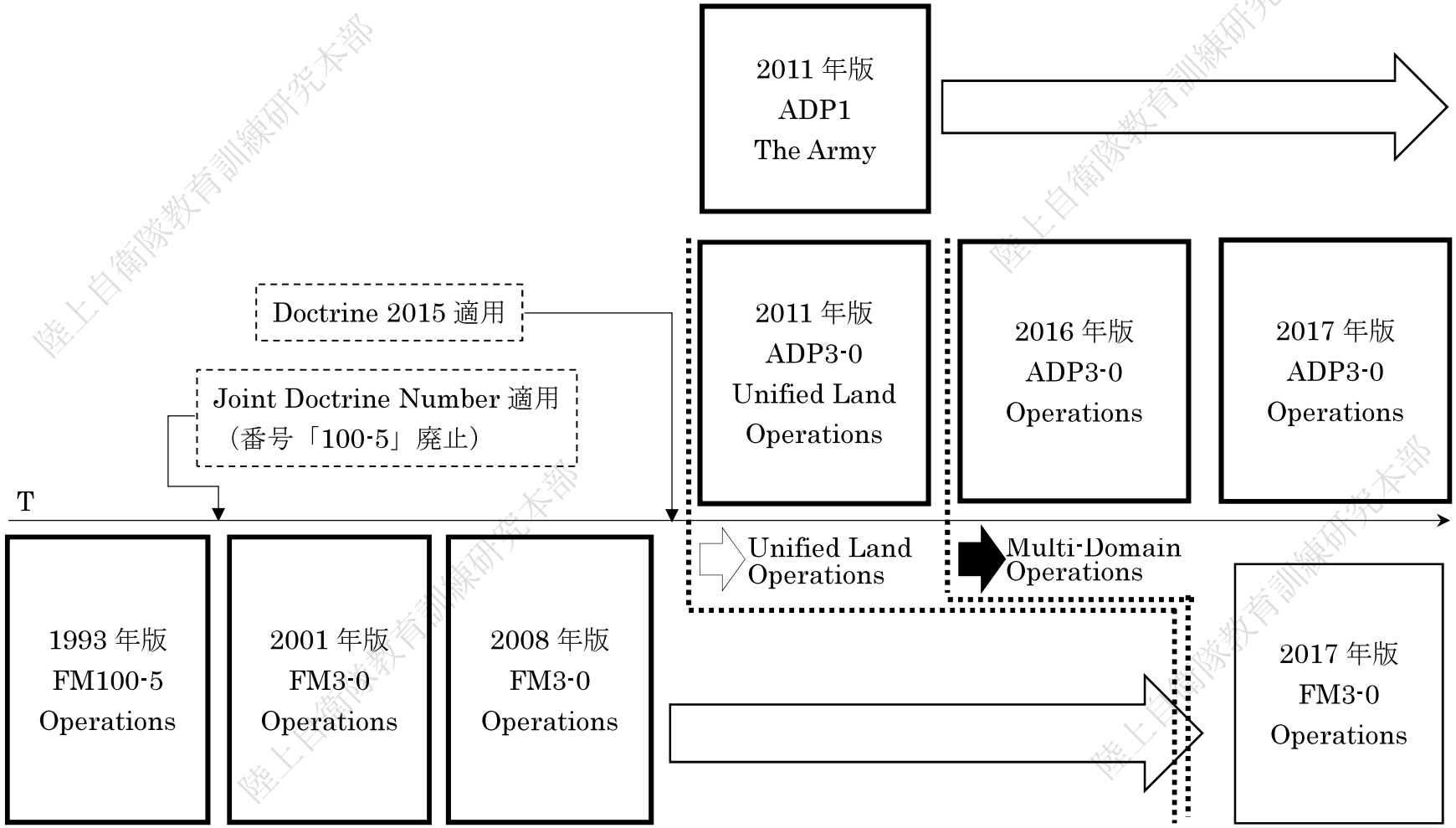
陸上自衛隊教育訓練研究本部

[5] 本稿においては、米陸軍の 1949 年改訂の FM100-5 “Operations”を指す場合、「1949 年版」のように改訂年度で表記する。

[6] 2001 年版から統合ドクトリン番号に変更され、“Operations”は、「100-5」から「3-0」に変更された。

別紙第 4

冷戦後の米陸軍のキャプストーン・ドクトリンの変遷



※太線が米陸軍のキャプストーン・ドクトリン

（2017 年 8 月現在）

陸上自衛隊教育訓練研究本部

（本研究の手法）

本研究は、「米陸軍のキャプストーン・ドクトリン改訂の契機は、米陸軍が関係した戦争の教訓である。」との仮説を立て、その変遷を追うことでその是非について検証する。実施にあたっては、陸軍種の視点を基本とするが、理解を深める上で必要な場合、政治レベルまで幅を拡大しての考察を試みることとする。研究にあたり、論旨の「幹」となる部分は、米陸軍が公式のホームページ上で公開している以下の三論文を参照している。

第 1、7、8 章は、

Del Stewart, “Victory Starts Here, A Short 45-Year History of the TRADOC”, TRADOC Military History & Heritage Office, Combat Studies Institute Press US Army Combined Arms Center, 2018[7]

第 5、6 章は、

Robert A. Doughty, US Army, “The Evolution of US Army Tactical Doctrine, 1946-1976.”, No.1, Levenworth papers, US Army[8]

第 6、7 章は、

General Kevin P. Byrnes, “TRADOC Historical Study Series TRANSFORMING THE ARMY TRADOC’s First Thirty Years 1973-2003 with foreword”, Military History Office, US Army TRADOC, 2003[9]

加えて米陸軍のドクトリン、米軍の公刊情報、学術論文、海上自衛隊幹部学校が公式ホームページ上で公開する研究論文、陸戦研究掲載論文[10]等の関連したオープンベースの先行の研究成果により補足した上で、有識者とのディスカッション結果も参考に、考察・分析を行っている。なお、脚注記事において、参考文献を表示していない記述は、「幹」となる対象論文中の引用である。

本稿の全体像と各編の考察範囲を別紙第 5 に整理する。1 回目の今回は、米陸軍が模

---

[7] https://www/armyupress.army.mil/Portals/7/combat-studies-institute/csi-books/victory-starts-here-a-short-45-year-history.pdf, last visited on March 23, 2019

[8] https://www.armyupress.army.mil/Portals/7/combat-studies-institute/csi-books/doughty.pdf, last visited on March 17, 2019

[9] https://apps.dtic.mil/dtic/tr/fulltext/u2/a434030.pdf, last visited on March 23, 2019

[10] チャールズ・E・カークパトリック（高井三郎訳）「湾岸戦争に勝利を収めた平時軍備政策―ベトナム戦争後 20 年の米陸軍―（3-1）」陸戦研究 5 巻 3 号 47-64 頁（1993 年）

チャールズ・E・カークパトリック（高井三郎訳）「湾岸戦争に勝利を収めた平時軍備政策―ベトナム戦争後 20 年の米陸軍―（3-2）」陸戦研究 5 巻 4 号 45-64 頁（1993 年）

チャールズ・E・カークパトリック（高井三郎訳）「湾岸戦争に勝利を収めた平時軍備政策―ベトナム戦争後 20 年の米陸軍―（3-3・完）」陸戦研究 5 巻 5 号 1-19 頁（1993 年）

（AUSA 陸戦学会論文 9 号（1991.11）「Building the Army for Desert Strom, by Charies E. Kirkpatrick」）

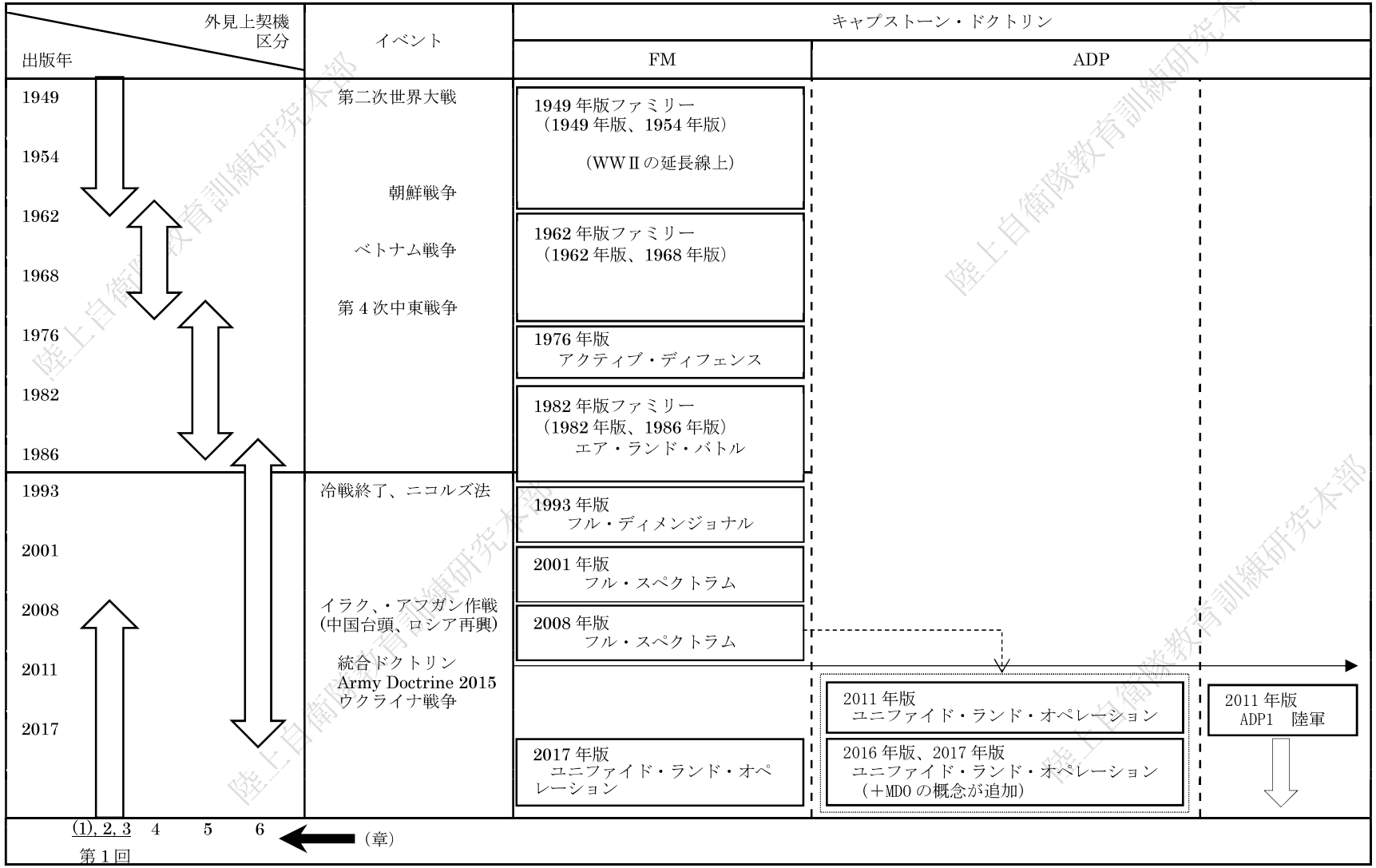
索中の MDO の経緯について紐解く。そして、第二次世界大戦直後までさかのぼった上で、冷戦初期の取組について触れ、次回以降、時代に沿って現代までの変遷を整理していく。

別紙第 5「本シリーズの各編（回）の考察範囲（予定）」

陸上自衛隊教育訓練研究本部

別紙第 5

本シリーズの各編（回）の考察範囲



陸上自衛隊教育訓練研究本部

（３）先行研究

先行研究として特筆すべきは、菊池による「米陸軍・マルチドメイン作戦（MDO）コンセプトー「21 世紀の諸兵科連合」と新たな戦い方の模索ー」[11]である。同論文は、主に軍種、統合レベル以上の視点で、MDO の変遷を、米国及び国防省等の白書などの資料や論文の裏付けに基づき分析・考察している。特に、米国が MDO コンセプトは、戦時と平時を明確に区分する米国の伝統的な考え方を変更したと指摘している点や[12]、冷戦時代の欧州戦略の下敷きとなったエア・ランド・バトル（Air-Land Battle, ALB という。）ドクトリンは、1982 年版 “Operations”において、諸職種連合が、軍種内の職種（機能）の能力を、相乗的に組み合わせた概念であり、このことは、CD 機動への連続性が認められ、MDO が諸職種連合の概念から「進化」したものであるとの分析[13]を行っている点、また、敵対者に対して多数のジレンマを強要し、メンタルな停滞・崩壊状態に陥れる機動戦的考え方を、消耗戦思想の強い陸軍が採用しているといった考察など、今後の米軍における更なる具体化を見守る上で、極めて重要なポイントに焦点を当てている[14]。この際、米陸軍のドクトリン出版物（教範）の内容の要所を分析し、MDO コンセプトに如何に反映しているのかを随所に明らかにする視点と考察は、極めて参考になる。

本稿は、2017 年頃までのドクトリンやコンセプト出版物を中心に、陸軍種レベルの視点での議論に照準をあてているおり、統合以上のレベルの視点の理解を深める過程で、菊池研究から示唆を得ている。

陸上自衛隊教育訓練研究本部

[11] 菊地茂雄, 「米陸軍・マルチドメイン作戦（MDO）コンセプトー「21 世紀の諸兵科連合」と新たな戦い方の模索ー」防衛研究所紀要第 22 号第 1 号 15-59 頁（2019 年 11 月）
[12] 菊地・前掲注 11）40 頁
[13] 菊地・前掲注 11）49 頁
[14] 菊地・前掲注 11）50-54 頁